ヤン・スィンゲドー先生を偲んで

本研究所草創期より 1990 年まで研究所員として研究に当たられたヤン・スィンゲドー先生が、2012 年 10 月 7 日、故郷ベルギーにて逝去された。宗教社会学者として国内外に広い交友関係をもった先生との思い出を、懇意にされた方々にお寄せいただいた。

ヤン・スィンゲドー先生の略歴

1935 年 11 月 8 日　ベルギー、ブルージュ生まれ
1954 年 9 月 8 日　淳心会に入会
1957 年 7 月　グレゴリアナ大学哲学科卒業
1960 年 8 月　司祭叙階
1961 年 7 月　ルーヴァン大神学校神学科卒業
1961 年 10 月　来日
1966 年～ 2011 年　オリエンス宗教研究所研究員
1970 年 3 月　東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了（文学修士）
1974 年 3 月　同人文科学研究科博士課程単位取得
1975 年 7 月　南山宗教文化研究所員
1975 年 11 月　南山大学文学部助教授
1980 年 4 月　同文学部教授
1982 年～ 2008 年　フィリピン、カメルーン、ベルギーなどの神学校ならびに大学で客員教授
1988 年 4 月　南山大学外国語学部教授
1990 年～ 1995 年　ローマ教皇庁諸宗教対話評議委員会諮問委員
1996 年 3 月　南山大学退職、同時に名誉教授
2001 年～ 2003 年　淳心会修道院（ローマ）院長

主要著訳書

『菊と刀と十字架と』（D. リード・松本滋・鈴木範久共著）日本基督教団出版局、1976 年
『「和」と「分」の構造―国際化社会に向かう宗教』日本基督教団出版局、1981 年
『日本人との旅』日本基督教団出版局、1983 年
トーマス・ルックマン『見えない宗教―現代宗教社会学入門』（赤池憲昭共訳）ヨルダン社、1976 年
W. R. コムストック『宗教―原始形態と理論』（柳川啓一監訳、D. リード、阿部美哉共訳）東京大学出版会、1976 年

赤池憲昭先生には特別にご寄稿をお願いした。その他の先生方のご寄稿は、「宗教と社会」学会 JASRS-MailNews 2012/12/28 号に掲載された追悼文である。再録にあたり、執筆者の先生方、また同学会の会長の大谷栄一・佛教大学准教授と常任委員の先生方のご了解をいただいた。

赤池憲昭

ヤン・スィンゲドーさんの訃報に接したときの私の心の応答を隠さずに申しあげれば、まず「まさか」と呆気にとられたのです。続いて「しまった」という思いが重なって頭が空になり、やがて「本当なのか？」と自問しながら、落ち込んで行きました。

この一連の意識の流れは、間接的にはスィンゲドーさんとの 2008 年の話し合いに原因があります。二人の恩師でもあった脇本先生の葬儀が平塚市で行われました。久方ぶりの顔合わせでしたので、「飯でも食おう」と近くのレストランに入り空いていたのを幸いに、あれこれ長話を交わしたのですが、その折、彼がこんなことを言ったのです。再来年は自分が司祭になって 50 年になるし、2011 年には日本に来て 50 年を迎える、と。

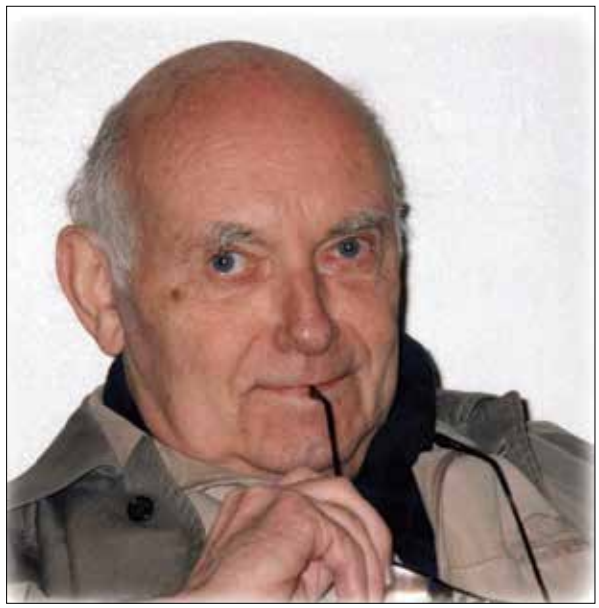
今にして思えば、この言葉には、スィンゲドーさんの自分の人生行路についてのある秘められた感慨が込められていたと推測するのですが、その時は、50 年という長さと区切りばかりに気をとられ、とにかく何らかの形で 50 年記念のようなものをしてあげたいと単純な発想だけで済ませてしまいました。帰り道、駅まで歩く際に、階段は上れないからといわれるのでエスカレーターのある百貨店まで行ったのですが、別に歩行が困難とも見えなかったので「どうしたの」と呟いただけでお仕舞いにしてしまいました。全くの不注意でした。もう少し丁寧に身体の具合を聞くべきでした。この後もスィンゲドーさんが重い病を負うことになるとは考えもしなかったのですから。

振り返ってみますと、スィンゲドーさんとの交流は、私が愛知学院大学に赴任し、彼が大学院博士課程に在籍しながら研究者としての狼煙をあげた 1970 年代の初め頃でした。1973 年には、彼の勧めがあって、一緒にハーグの CISR（Conférence Internationale de Sociologie Religieuse 国際宗教社会学会、現 International Society for the Sociology of Religion）に参加、更に 1976 年にはスィンゲドーさんが南山大学助教授の資格で南山宗教文化研究所員として名古屋に滞在され、私たちの交流の集約期が生み出されました。この期間は 1970 年代から 1980 年代と約 20 年間に及ぶと思います。そして、恐らく、スィンゲドーさんの研究活動が最も花開いたのも、この時期だったでしょう。もちろん、これ以降も彼の論文は次々と産み出されてはいますが。

スィンゲドーさんは数多くの業績を公にしています。著書・翻訳書・論文集や専門雑誌での論文などを始め、書評や講演・座談会あるいは新聞記事など日本語・英語取り混ぜて大変な数に上ります。今仮に彼の業績内容を交通整理してみますと、こんなふうになるのではないでしょうか。一つは「世俗化論」と「宗教概念の問題」、一つは「日本人論」と「日本人の宗教意識の問題」です。この四つのテーマは夫々が互いに絡み合って論じられる場合があり、論文によってはかなり複雑な展開を示すものもあります。

世俗化に関する論文は、『宗教研究』208 号（1971）の〈展望〉欄に纏められている「現代の世俗化論争―ルックマンを中心として」が嚆矢でした。この紹介論文は当時の欧米を中心とする宗教社会学の主要課題であった世俗化の論議を、的確に位置付けた明解な内容で、現代日本の宗教状況との関連を探るきっかけともなりました。世俗化をめぐっては、これを宗教の衰退と取るのか、あるいは宗教の変容（宗教の純化または宗教の私化）と取るのかなどなど、世俗化への視角の違いによって、さまざまの

意味概念の相違が生まれ、結局その行く先は「宗教とは何か」という宗教概念の問題となって収拾が難しくなります。スィンゲドーさんは条件付きではありますが、ルックマンの「人間的有機体による生理的本性の超越」という人間としての意味体系からの宗教概念に沿いながら、世俗化論をはじめ宗教の問題を解こうとする立場に立っているといっていいでしょう。



この論文以降、たとえば『国際宗教ニュース』（1976）、『思想』（1979）、『東洋学術研究』（1987）などに、宗教社会学的研究と重ね合わせながら、課題の追求を試みており、とりわけ 1978 年には、定例の学会の間の特例として開かれた CISR 東京会議では、代表して日本の世俗化説に検討を加えています。CISR に関連して付け加えれば、この国際会議は 2 年毎に主としてヨーロッパで開かれていますが、スィンゲドーさんは、日本の研究者が出来るだけ数多く参加して国際的な貢献をするように呼びかけたり、自分の発表も積極的に日本の事例を取り上げたりして、日本の宗教研究の向上を補佐してくれていました。

しかし、スィンゲドーさんの熱心な世俗化問題への提起にもかかわらず、「現代日本における宗教と世俗化」についての具体的な研究成果は漠然としたままでした。一つには、世俗化問題の発端が、教会中心的宗教性が個人的宗教性へと変質の過程を進めているキリスト教社会に動機付けられていたことにもよります。日本の宗教は教会型でないから世俗化論議はなじまない、あるいは、日本の宗教は元来世俗的要素を包み込んでいて現代社会においてとりわけて世俗化が問題とはならないなどといった見解があり、欧米の研究者による世俗化理論そのものの理論的解釈には注目しても、日本の宗教についての特殊性に固執する傾向がありました。スィンゲドーさんは、確かに「世俗化論」は外来の論議ではあるけれども、日本の祭りや通過儀礼などを含めながら、現代における「日本的な世俗化論」（宗教変容論）を検討してもよいのではないか、キリスト教に限らず、20 世紀以降宗教は特に産業社会にあっては大きな振動を予兆させていると思うからと感想を述べています。確かに、日本の場合も、たとえば、皆で墓地へと見送り祖霊としての再会を待つための葬儀から、限られた人だけの別離のための葬儀へと形が変わりはじめており、通過儀礼としての意義が薄れつつありますから。

スィンゲドーさんの場合、世俗化過程への関心がバネとなって、世俗社会といわれる日本社会での宗教の在り方、それはまた日本人の意識構造ともつながるのですが、所謂日本人論といったテーマに展開することになります。もっとも、スィンゲドーさんは、「日本人論」などと言った大げさな

開き直った言い方はせず『日本人との旅』（1983）と名付けていますが。

この著書は『「和」と「分」との構造』（1981）と共に、スィンゲドーさんの自著です。『和と分』の方は先に挙げた世俗化に関する論文をはじめ各種の寄稿論文の集大成ですが、編集上の操作のために文章の部分的なカットなどもあり、元の論文を読む方が分かりやすいものもあります。『旅』については、教え子らと作った同人雑誌に書いたものも引用したと断っていますが、全体が纏まった書き下ろしの体裁で、内容は論文というよりもエッセイ風でユーモアに富んだ読み物です。

『旅』は日本人との出会いの出来事や、日本人的な人間の捉え方あるいは思考様式などが面白く綴られていますが、同時にスィンゲドーさんの自叙伝でもあり、スィンゲドーさんの自己認識の書でもあります。7年間の神学校生活の末、1960年に司祭に叙階、1961年神学校卒業、その8月兼ねて願っていた日本行きが淳心会総長から指示されたそうです。「私はユダヤ人に対しては、ユダヤ人になった。律法のない人に対しては、律法のない人のようになった」という聖パウロの言葉を胸に抱き、日本人になりたいという願望に燃えて40日間の船旅に立ったと語っています。

日本への〈初恋〉はやがて〈失恋〉へと転じます。いろいろの切っ掛けがありますが、たとえば、日本人の「引き出し的思考様式」の章では若干の皮肉を込めて次のように言っています。「日本人が人間を〈日本人〉と〈西洋人（外人）〉に分ける専門家であるお蔭で私は、いかに長く日本に住んできたとしても、日本人になるまでの旅を永遠に続けることを許されている」、と。どこにも（他の論文などでも）はっきりとは言っていませんがスィンゲドーさんは多分日本人になりたいという願いは撤回していたのだと思います。けれども、スィンゲドーさんには次の段階がありました。「第三の段階、〈真の愛〉の段階は、共通点も相違点も、長所も短所も、あらゆる側面を十分に考慮した上での、均衡のとれた相互関係の段階なのである」。ただし、初恋・失恋・真愛は筋書どおりに連続するものではなく、実際には入り混じって現れてくるので、綺麗ごとではゆかず、悩みが多いけれども、と告白しています。

しかし、スィンゲドーさんにとっては、日本人の宗教の在り方は、真愛のモデルのように映ったのです。『神道とキリスト教』（南山宗教文化研究所編、春秋社、1984）は、諸宗教をめぐって「普遍性」と「特殊性」の性格を論じた内容ですが、スィンゲドーさんはこんなことを言っています。日本の諸宗教は昔から多様性に富んだ状況にあったので理論的にも実践面でも「多の和」を重んじてきたが、キリスト教は最近まで独占的地位を経験してきたため、「全世界の一致」を絶えず理想として掲げた。

> いかに理想に燃えようとも、キリスト教は現実を無視するわけにはいかない。私見によれば、キリスト教は日本の宗教の唱えてきた〈多の和〉の精神から学ぶ所がきわめて多い。

南山宗教文化研究所が創立50周年記念として刊行した『宗教と宗教の〈あいだ〉』（風媒社、2000）の中でも、スィンゲドーさんはこう言っています。現代世界のグローバル化過程を志向して、諸文化・諸宗教がそれぞれの役割をはたすべきであるといった理想そのものは尊いとしても、残念ながら現状は尚レトリックに終わっている。「つまり異文化交流にとって自文化中心主義が大

きな妨げになっていると同様に、宗教間対話の場合は自宗教中心主義がいまだにそれを大きく害していると言えよう。自己中心的な対話に〈隠された意図〉があり、対話それ自体が世界戦略の一手段であるという批判が生まれてくるもの不思議ではなかろう。そこで、宗教の多様性や、宗教間の差異そのものを価値あるものとして認めない限り、宗教間対話はやはり単なる出会いに過ぎないものになりがちである」。こう述べてスィンゲドーさんは、宗教的伝統の相対化を強く主張します。「それぞれの宗教による自己相対化は互いの出会いだけではなく、出会いにおける相互交換をも進めるはずである」と、結論づけています。

この論旨は先ほどの著作名にも使っていた「和と分の構造」という表現に置き換えることができます。和と分は日本の宗教状況を説明するためにスィンゲドーさんが援用した言葉ですが、「分によって和す」つまりそれぞれが自分の分を弁えた上で、しかも和を守るという日本人の精神こそ、世界の宗教がこれから心掛けるべき規範であるというわけです。

スィンゲドーさんの世界の宗教一般に対する願いは、当然スィンゲドーさん自身の個人的な心情としての宗教観（あるいは宗教的立場）に根ざしているわけですが、これを表明している発言があります。それは『新しい神観の探求』（星雲社、1986）の中で、スィンゲドーさんの宗教論に対する質疑応答の際に語られた部分です。

> 日本に来た時、私はカトリックの神父ですから普通のヨーロッパ人よりも一応理想としての神概念を持っていたわけです。しかし長く日本にいたせいかもしれませんけれども、特にスコラ哲学的な神概念は徐々に薄れていきました。神について語らない方がよいのではないかというようになってきたのです。（略）ことばよりも行動で表した方がよいのではないかと思います。（略）
>
> キリスト者も他の宗教の人達も悔い改めをしなければならないと思います。我々の持っている神概念・信仰をいつも探求し否定する必要があります。それは他宗教との出会いによってできるものではないかと私は思います。（略）
>
> キリスト教はいつも理想をかかげて自然をつぶそうとするところがあるのですが、日本の宗教のように、特に信徒には自然そのものを聖なるものとして認めるという傾向があるということです。つまり多様性――互いに対立するものではなく、互いにバランスを保ちながらの和――をそのまま認めるのです。私自身もやはり、根底には人間として自然的な多神教があると思います」。

（余計なことですが、私は神父さんともあろう人が、こんなことを、公にしてよいんだろうかと、いささかあきれました。同時に、こうした内容を率直に表現できる現代カトリックの太っ腹というか骨太には敬服しました）。

1990年代以降、スィンゲドーさんも名古屋から去られ、また神父としての仕事に多忙の身となったようです。一方私も大学の行政面の役割に巻き込まれて、交際が遠ざかりました。スィンゲドーさんと私との間柄は、体裁よくいえば学友ですが、まずは親しい仲間といったところで、承知はしていましたが神父さんとして考えたことも、話したこともありませんでしたし、また彼の方も神父としての態度も神父としての話なども一切ありませんでした。ですから、在日50周年をまとめてみようと思った時、私は彼の研究者としての面しか知らず、彼が神父としてどのような仕事をし、どのよ

うな人間関係を築いていたのか全く不明である事に気付いたのです。

ここからは言い訳にしかなりませんが、彼の半面を知る上でまずは論文などで彼の思想を自分なりに纏めた上で、改めて今まで話題に扱わなかった側面を話してもらい、できればそれを裏付けたいと考えました。姫路に引っ越したと連絡があり、新しい仕事に就いて大変だなと思いながら、私自身の体調不良や雑事の重なりで訪問が遅れ、やっと始末をつけて姫路行きを連絡しましたら、「スィンゲドーさんはベルギーへ帰られました」と係の方のご返事があり、わけも分からず彼の昔のフランダースの住所に手紙を出しましたが、音信不通のまま、彼の逝去を日本の新聞で知ることになりました。

『旅』の「あとがき」でスィンゲドーさんはこう言っています。「私が手探りで捜しているのは、日本あるいはフランダース、あるいはまた別の特定の国ではなく、互いに異なった人間性を分かち合うことのできるあらゆる国の具体的な人間なのである。(略)もし万一の場合、事情があって日本を去ることになれば、私は再び喜んで旅を続ける」。けれどもこの時（つまり 20 年以上以前）は、日本人との一緒の旅を望んでいました。2011 年 11 月 30 日、フランダースへの出立に際して、スィンゲドーさんがどのような心境であったのかは分かりません。ただ、昔スィンゲドーさんが自分の家に帰った時、話の際に、今は亡きお母さんから「おまえは日本人みたいだ」と言われ、日本ではいつも「外人」と言われることを思い出して、一体自分のアイデンティティは何だろうと一瞬頭をかすめたそうです。50 年という日本での自分の人生をスィンゲドーさんはどのように自分のものとして納得していたのでしょうか。

スィンゲドーさんの、例えば「世俗化問題」とか「日本人論」とかにはいろいろ批判や異論もあるでしょうし、それはそれで当然と思います。しかし、日本を自分の中に抱え込もうとした彼の熱意には、ただ感謝があるばかりです。日本を旅立ち、フランダースを経由して、帰天への旅路を辿ったスィンゲドーさん、やはりあなたのアイデンティティは日本でもフランダースでもなく、帰天の理念を生み出した世界にあったのでしょう。

それにしても、あなたが日本を旅立つ時、せめてもお見送りすべきでした。すみませんでした。「そうなんだヨ」「そうじゃないんだヨ」と目玉をキョロキョロさせて、笑いながら語り続けるスィンゲドーさんの面影は、あなたと出会った日本人の誰もが忘れることはないでしょう。

井上順孝

あらためて数えてみればスィンゲドーさんとは 44 年のお付き合いであった。私が東京大学文学部に進学したとき、大学院は社会人経験者、他大学の出身者ばかりで、皆ユニークな人たちであったが、中でも異彩を放っていたのがスィンゲドーさんだった。それまで観念の中だけの存在であった神父さんと、直接いろんな会話ができるようになって、突然に世界が広がったような気がしたものである。

まだ私が大学院生の頃だったと思うが、「マリアってどんな存在ですか？会いたいと思いました？」と変な質問をしたことがある。「小さい頃はマリアに会うのが怖かったですね。何を命令されるか分からないですから。」妙な質問にも正直に答えてもらい、本当に飾り気のない方だったと感じる。

お酒がとても好きで、人も大好き、という神父イメージが、スィンゲドーさんによって私に刷り込まれた。そして命令一つで即座に世界の各地に飛び立つ境遇にあるということも実感させられた。アフリカの確かカメルーンにおられたときではないかと記憶しているが、たまたまラジオで日本の放送を聞いてきたとき、私の声がしてきて、すぐ分かったという経験をされたようだ。晩年に何度かその話を聞かされたが、その話しぶりからスィンゲドーさんも縁というような東洋的文化理解を取り込んでいたのではと感じた。

日本文化を理解し、日本の研究者と外国の研究者との交流に心を砕いてもらった。国際会議の折には、つねに日本人研究者と外国人研究者との橋渡しを意識されていたように思う。日本の宗教研究にとって、とても大きな貢献をしていただいたとつくづく感じている。

あるとき、スィンゲドーさんは「日本人はウィンクができない」と自説を主張された。私が「こうじゃないですか？」と、片目をちょっとつぶると、「違うんです」と言って、見事なウィンクを披露してみせた。

あの茶目っ気たっぷりの笑顔をもう見ることができないのだという悲しみが、ときおり胸をついてくる。

島薗 進

ヤン・スィンゲドーさんは語学の天才だった。何ヶ国語できるのかうかがったことがあるが、数が多いので覚えていない。日本語の表現力もすばらしいもので、ヨーロッパの、またベルギーのフランドル地方の文化を見事な日本語に乗せて伝えてくれた。柳川啓一先生の北海道、常呂調査にともに加わったときに語っておられたことがいくつも耳に残っている。あれは、1973年ではないかと思うが不確かだ。

当時は「国鉄」の時代で、ストライキが盛んで列車が遅れた。常呂に着くまでに相当の時間がかかり、乗り継ぎの鉄道が待っていてくれてかろうじて夜中に着いた。3月の北海道オホーツク海岸は寒い。朝は氷点下10度以下だったと思うが、これも不確かだ。

だが、スィンゲドーさんは北海道の光景がとても気に入っている様子だった。フランドルに地形や林、農地の様子がよく似ているとのことだ。緯度も近いのか。常呂の町で遊ぶ子供の写真をとっていた。「子供が好きだ」と言っておられた。今でもフランドルに家族が集まると相当の人数になるとのことだった。日本の宗教を見るときも、共同体の集いにその基礎を見ようとしていたのは柳川先生譲りでもある。

ジンギスカンをやったが、中牧さんの趣味もありニンニクをバンバン入れた。私などはおかげでからだが内から暖まったと感じたが、スィンゲドーさんは相当にまいったようだった。スィンゲドーさんはこよなく日本を愛した人だが、ときどき「それはきつい」という表情をチラリと見せることがあった。しかし、すぐにそれとなく内にしまっておられた。歌がとても上手だったが、カラオケに誘うと断られた。「そこまでやるとほんとうに日本人になってしまう気がする」とのことだった。自己紹介をするのに、漢字の説明をして、「新外道です」ともよく言っておられた。

ヨーロッパの宗教社会学への案内役として、70年代、80年代にお世話になったことは多い。オランダの「ピラリゼーション」（柱状化）について早く教えていただいたし、イタリアのチプリアーニの「インプリ

シット・レリジョン」概念を教えていただいたりした。とにかく気さくなのでお尋ねしやすかった。著書『「和」と「分」の構造—国際化社会に向かう宗教』（1981 年）や、D．リード、松本滋、鈴木範久の諸氏との共著『菊と刀と十字架と』（1976 年）には、スィンゲドーさんの独自の日本宗教の見方が表されている。カトリックと日本宗教の共通基盤は多いという認識が根柢にあったと思う。

海外に出るのが遅かった私（1984 年に初渡米）にとって、スィンゲドーさんは大切な窓だった。頼りにすることも多かった。カトリック松原教会での追悼ミサでは、そのことがあらためて思い出されて感謝の念に包まれた。

中牧弘允

2012 年初春、スィンゲドーさんからは年賀状が届かなかった。かわりに病気療養のためベルギーに暮らしているとの葉書がきた。スィンゲドーさんが所属していた姫路の修道会からだった。そして初秋、ついに訃報が中野毅氏を通じて舞い込んできた。ブリュージュでの再会をひそかに期していたのに…。

スィンゲドーさんとのお付き合いは 1970 年以来、つまりわたしが東大宗教学研究室に籍を置くようになってから 40 年以上にもわたる。年齢は 10 歳ほど離れていたが、学年は数年ちがっただけである。ゼミや調査は一緒で、柳川門下の兄弟弟子といった感じであり、とくに飲み仲間として親しくさせていただいた。日本語がとても堪能で、英語で話した記憶がまったくない。

スィンゲドーさんはカトリックの神父でありながら、権威主義的なところはさらさらなく、明るく気さくで、「枢機卿さま」と呼びかけても、そのような態度をとることはなかった。くりくりとした目を見開いて議論するさまは、好奇心の塊でもあった。

専門の宗教社会学ではルックマンやドベラーレの学説を咀嚼する一方、日本文化、とくに日本の宗教に関する造詣が深く、宗教間の対話や相互理解には職業柄とりわけ熱心だった。独自の学説をどんどん打ち出していくという学究肌ではなく、学者間の橋渡しをするメディエーターとして独特の才があった。国際宗教社会学会ではそれが如何なく発揮され、日本人と外国人とを問わず、世話になった研究者は数知れない。

あらためてスィンゲドーさんの功績を思い返しながら、誰に例えたら最もふさわしいかと考えた。とりあえずの結論は、ルイス・フロイスである。16 世紀の日本にやってきたリスボン出身のイエズス会修道士である。かれは 35 年も日本に滞在し、宣教報告を書くだけでなく、大部の『日本史』をまとめた。その『日本史』のエッセンスを抽出し、おそらくは神学生用に準備した自筆原稿が、戦後、マドリードで発見された。邦訳は『大航海時代叢書 XI』（岩波書店、1965）に初出し、のちに『ヨーロッパ文化と日本文化』（岩波文庫、1991）として刊行された。これはヨーロッパと日本を比較した 600 以上もの短文から構成されている。『菊と刀と十字架と』（日本基督教団出版局、1976）の執筆者の一人でもあるスィンゲドーさんなら、もし戦国時代の日本に上陸したら、日欧比較文化論をこのように易しくかつ鋭く展開したのではないかと思った次第である。

パライゾ（キリシタン用語の天国）では安斎伸「枢機卿」と「枢機卿」同士の対話を楽しんでおられるのであろうか。

中野 毅

スィンゲドー先生とのお付き合いは、私が1975年に筑波大学大学院で宗教学を本格的に勉強し始めた頃からだったように思うので、かなり古く、記憶がはっきりしないものまである。ここ数日、この追悼文を書こうとして、彼の故郷ベルギーの古都ブルージュ近郊にある村Torhoutを訪れ、彼のお姉さん宅に泊めていただいた年月が、どうしても思い出せなくて弱った。国際宗教社会学会（ISSR／SISR）が2年ごとにヨーロッパ各地で開催されるが、そこに参加する途次に好意に甘えてお邪魔したのである。亡くなられた柳川啓一、安斎伸、阿部美哉の諸大先生と一緒だったと記憶しているので、1985年ベルギーのニュー・ルーバン大学での大会か、87年の西ドイツ（当時）チュービンゲンでの大会の際だと思うのだが、PCの記録を開いても結局はっきりしないまま、書かせていただく。

というのも、スィンゲドーさんの事を考える度に、どうしてもこの時の事を思い出してしまうからだ。到着した晩に、庭で鶏や豚などを飼っている広々としたお姉さん宅で盛大なディナーを皆でいただいた。メイン料理はウナギをぶつ切りにしてホワイト・ソースで煮込んだもので、始めは脂っこそうで恐る恐る食べたが、意外とさわやかな味で大いに食が進んだ。飲み物は初めは上品なワインだったが、やがてベルギー名物のビールはいかがと出てきたのが、Devilと称する黒ビールだった。どす黒く、ドロッとした感じのビールだったが、飲んでみると甘みもあって飲みやすく、皆、大いに飲んで盛り上がった。夜も更けたので、さあ寝ようと立ち上がりかけたが、柳川先生が起き上がれない。酔って足にきてしまったのである。何人かで担いで2階のベッドに寝かしつけたが、このDevilとやら、修道院で造られた、度数が30度以上あるくせ者だったのである。いつものビール感覚でグイグイ飲んでいたため、全員が深酔いしたのはいうまでもない。

この滞在には内緒の裏話がある。当時は格安航空券の一番手だったKorean Airでパリに降り、乗り換えてブリュッセル空港に着いたのだが、トランジットの手際が悪くてトランクが届かず、結局、翌日の便になってしまった。当時はままあったことだが、困ったのはトランクに着替えなどが入っていたことである。お姉さん宅に着いた後、その事情を聞いた途端、じゃあ買い物に行きましょうと、車で店に連れて行ってくれた。早速そこで下着類を購入したのだが、Sサイズを買ったのに、どうにもブカブカで困ったことが今でも忘れられない。

こんな珍道中だったが、古都ブルージュの美しい町並み、ブリュッセルの通称・小便小僧、バケツのような容器に山盛り料理されたムール貝など、スィンゲドーさんが案内してくれた思い出は、尽きることがない。ともかく楽しい思い出を沢山つくってくれた大先輩だった。

真面目な仕事も、いくつか一緒にやらせていただいた。古くは、柳川啓一編『現代社会と宗教』（東洋哲学研究所刊、1978年）の編集と出版である。これは2年越しの公開講演会をもとに出版したものであり、森岡清美先生ほか壮々たる方々に講演・寄稿していただいた。スィンゲドーさんは「世俗化―日本と西欧」と題し、当時、盛んであった世俗化論を分かりやすく紹介して下さった。後半生の大仕事の一つは、「カトリックと創価学会」の宗教対話である。その成果は南山宗教文化研究所編『カトリックと創価学会』（第三文明社、1996年）として

出版されたが、この対話を提案していただいたのが、スィンゲドー先生であった。南山宗文研は日本の諸宗教との対話を積極的に行っていたが、新宗教で最も活動的な創価学会との対話をやるべきと研究所を説得し、こちらに持ちかけてきたのでした。東洋哲学研究所の研究員を中心に、93年秋から打ち合わせやセミナーを開始したが、本格的で真剣な宗教間対話として極めて有意義で、実質的な対話であったと、今でも思う。私個人は、カトリックの歴史と伝統の重みや深みを、戦慄を覚えるほどに学ばせていただいた。

まだまだ言い尽くせませんが、公私ともに本当にありがとうございました。天国でゆっくりとお休み下さい。といっても、柳川・安斎・阿部、そしてウィルソンなどお酒大好き先生が大勢いるので寝てもいられないでしょうが、腰を抜かさない程度にDevilでも楽しんで下さい。

ジェームズ・W・ハイジック

私はヤン先生が南山宗教文化研究所に在職した18年間ともに働いた。また研究所に付属する宿舎に一緒に住んでいた。パウルスハイムというこのわれわれの小さな「家庭」には日本国内および海外から何百人もの研究者が出入りし、私は彼とともにこうした人々との交わりを楽しんだ。このように研究所での営みは仕事だけではなく私生活にまでまたがっていたため、ヤン先生との親交は年々深まっていった。私が彼よりどれほど多くを学んだかについてはとうてい記しえない。先生の気さくな態度、ユーモアに輝く目、ならびに生き生きした会話はつねにともに学びともに暮らす者たちの人生に豊かな彩を添えるものであった。

彼は食卓を囲んだ会話のなかで、自分は父親の跡を追って60歳で学問生活から退くとよく語っていた。私は、その年齢になれば考えは変わりますよとからかったものだが、実際に1996年に約束どおり彼は南山から身を引いた。それから、健康不安になるまで長年にわたって、アフリカとフィリピンのあいだを頻繁に往復するかたちで——かならず旅の途中で日本に立ち寄るように心がけていたが——仕事の焦点を若手の神学生に移動し、彼らの視野をより広い宗教世界へと開こうとした。

顧みれば1990年、ヤン先生は突然に謙虚以外のなにものでもない気持ちから研究所での第一種研究所員の身分をポール・スワンソン氏に譲ると発表し、われわれ皆を驚かせた。スワンソン氏は4年前からJapanese Journal of Religious Studiesの編集・出版に協力してきたのであったが、先生は「今すぐにスワンソンさんを研究所に取り込まないと、きっとどこか他の大学が彼をかっさらってしまうよ」とだれひとり予想もしていなかった言葉を発して、学部へと移っていった。

とはいえ、肩書きが変わったものの、研究所に対する献身は依然として変わらなかった。退職する日まで研究課題を手放すことなく、また研究所のさまざまな活動への配慮も怠らなかった。今もヤン・スィンゲドーという名前を口に出すだけで、微笑とともに思い出があれこれ浮かんでくる。わが人生の豊かな恵みのなかで、あまりに短かったとはいえヤン先生の道連であったことはその最大の実りの一つである。

あかいけ・のりあき
愛知学院大学名誉教授

いのうえ・のぶたか
国学院大学教授

しまぞの・すすむ
上智大学特任教授・同グリーフケア研究所所長

なかまき・ひろちか
吹田市博物館館長・国立民族学博物館名誉教授

なかの・つよし
創価大学教授

じぇーむず・W・はいじっく
南山大学名誉教授・南山宗教文化研究所